

『古今集』恋の部三から恋の部四までの構造

——左右対称の対応関係という観点からの分析——

平 沢 竜 介

恋の部三の構造の分析に移ろう。恋の部三の巻頭歌616から622までの歌群を示すと、以下のようになる。^平

弥生の朔日より、忍びに人にもら言ひて、のちに、
雨のそほ降りけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

616 起きもせず寝もせで夜をあかしては春のものとしてながめ
くらしつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとに、よみてつかは
しける

617 つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよしも
なし

かの女にかはりて返しによめる なりひらの朝臣
618 浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流ると聞かばたのみむ

題しらず 読人しらず
619 寄るべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となり

き
620 いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにい

ざなはれつ

621 逢はぬ夜の降る白雪と積りなば我さへともに消ぬべきも
のを

この歌はある人のいはく、柿本人麿が歌なり
なりひらの朝臣

622 秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさ
りける

616と617は「ながめ」の語を詠み込んで対応し、617と618は贈答
歌で「涙川」「袖」の語を共有して対をなす。618は「浅みこそ」、

619は「寄るべなみ」といずれもミ語法を用い、かつ618は「浅み
こそ袖はひつらめ」、619は「寄るべなみ身をこそ遠くへだてつ
れ」と「身」の語を共有して対応する。619は「寄るべなみ身を

こそ遠くへだてつれ」、620は「いたづらに行きては来ぬるもの
ゆゑに」といずれも逆接表現を用いて対をなし、620は「いたづ
らに行きては来ぬるものゆゑに」という逆接表現を取るのに対

し、621は「逢はぬ夜の降るしらゆきと積りなば」と順接表現を
取るという点では対照的であるが、いずれも恋しい人になかな

か逢うことができない様を詠じて共通する。621の「逢はぬ夜の
降るしらゆきと積りなば」、622は「逢はで来し夜ぞひちまさり

ける」といずれも恋しい人に逢えない夜を詠じて対をなす。616から622までの歌群内の歌は、前後に位置する歌とそれぞれ対応関係を有することになる。

616は詞書に「三月一日ごろから忍んである女性と言葉を交わすようになつて、その後雨がしとしと降っている時に詠んでその女性に贈った歌」とある。恋の部三の冒頭部分は、まだ恋する人と逢瀬を遂げていない状況を詠じた歌から始まっており、この歌を詠んだ時点ではまだ歌の詠み手である業平は、相手の女性と関係を持っていない。この歌はそうした状況の中で、自宅で起きるでもなく寝るでもないような状態で夜を過ごし、夜が明けても長雨の降る様をほんやりと眺めながら物思いに耽っている様を詠じた歌と理解される。622も歌の配列位置および「逢はで来し夜ぞ」という表現から、まだ逢つたことのない女性のもとから帰つた後に詠まれた歌と想定される。616と622の状態を詠じた歌で、作者が業平という点でも共通する。また、617の「長雨」に対し、621は「降る白雪」を詠み込み、ともに恋しい人に逢えない状況を詠じて対をなす。さらに、616が「長雨」を詠ずるのに対し、621の「降るしらゆき」と詠じ、616は「長雨」と「ながめ」、621は「消ぬ」に「消える」と「死ぬ」の意を掛けて共通し、617は「逢ふよしもなし」と詠ずるのに対し、622は「逢はで来し夜」と、どちらも「逢ふ」の語を詠み込んで対応する。

さらに、617は「逢ふよしもなし」、620は「いたづらに行きては来ぬるものゆゑに」と、ともに恋しい女性に逢えないことを



図 1

詠じて共通し、618は「身さへ」、621は「我さへ」と類似した表現を用いて対応し、618は「袖どころか身まで流れたと聞いたあなたを頼りにします」、620は「訪ねて行つてもむなしく帰つてくるだけなのに、逢いたい一心で誘い出されることだ」と、どちらもある条件を提示した構文となっている点で共通し、かつ618は男の訪れを待つ女の歌、620は女の所に通う男の歌という点で対をなす。

このように見てくると、恋の部三の冒頭七首は、619を中心に左右対称の対応関係を構成する。この対応関係を図示すると、図1となる。

続いて、622から631の歌群を示してみよう。

(題しらず)

なりひらの朝臣

622 秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさ

りける

小野小町

623 みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足

たゆくくる

源宗于朝臣

624 逢はずしてこよひ明けなば春の日の長くや人をつらしと
思はむ

壬生忠岑

625 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし
在原元方

626 逢ふことのなぎさにし寄る波なればうらみでのみぞ立ち
帰りける

読人しらす

627 かねてより風にさきだつ波なれや逢ふことなきにまだき
立つらむ

ただみね

628 陸奥にありといふなる名取河なき名とりてはくるしかり
けり

御春有助

629 あやなくてまだきなき名の龍田河渡らでやまむものなら
なくに

もとかた

630 人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとを言
はむ

読人しらす

631 こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世に
し住まへば

622 から626までの歌群の内、622は「逢はで来し夜ぞ」、624も「逢
はずして」、626も「逢ふことのなぎさにし寄る」と、いずれも
逢うことが叶わない男の様を詠じて共通する。625は「有明のつ

れなく見えし別れより」と詠ずるが、この「つれなく見えし」という表現は、月がつれなく見えたという意味の他に、通っていった女がつれなく見えた、すなわち逢つてくれなかったの意を表現していると解釈される。また、623は「みるめなき我が身をうらと知らねばや」と、女の側から男と逢うことのできない状況を詠ずることで、男が空しく帰る様を想像させる。このように見てくると、622から626までの歌群は男が女が逢うことができず、空しく帰っていく様を詠じている点で五首の歌がそれぞれ相互に対応する関係を構成する。

626は「逢ふことのなぎさにし寄る波なれば」、「立ち帰りける」、627は「かねてより風にさきだつ波なれや逢ふことなきに」といづれも逢うことが無いことを「波」、「立つ」といった語を用いて表現し対をなす。

627から631までの歌群は、627は「逢ふことなきにまだき立つらむ」と「なき名が立つ」ことを詠じ、628は「なき名とりてはくるしかりけり」、629は「なき名の龍田河」、630は「我はなき名の惜しければ」、631は「またもなき名は立ちぬべし」といづれも「なき名」を詠じて共通する。

また、622は「逢はで来し夜」、627は「逢ふことなきに」といづれも恋しい人に逢えない様を詠じて対をなし、623は「わが身をうらと知らねばや」、629は「まだきなき名の龍田河」とともに掛詞を用いて共通する。624は「人」、「思はむ」、630は「人」、「言はむ」と類似した表現を取って対応し、625は「暁ばかり憂きものはなし」、628は「なき名とりてはくるしかりけり」と類似した構文を取って対応する。626は「逢ふことのなぎさにし寄

る波なれば」、631は「人にくからぬ世にし住まへば」とどちら
も順接確定条件の構文を取り、「なき」、「立つ」という表現を
共有して対をなす。622と627、623と629、624と630、625と628、626と631
という対応関係は、626と627の対を中心に左右対称の対応関係を
構成する。

このように見えてくると、622から626までの歌群は、歌群内の全
ての歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという関係を構成し、
624を中心に左右対称の構造を形成し、627から631までの歌群も歌
群内の全ての歌が歌群内の他の全ての歌と対応関係を持ちつつ、
629を中心に左右対称の対応関係を形成することになる。また、
622から626までの歌群の末尾に位置する626と627から631までの歌群
の冒頭に位置する627が、右に述べたように対をなすことから、
622から631までの歌群は、626と627の対を中心に左右対称の対応構
造を形成し、さらに622から626までの歌群のそれぞれの歌が、627
から631までの歌群のそれぞれの歌と一首ずつ対応し、626と627の
対を中心に左右対称の対応関係を構成する。以上述べてきた関
係を図で示すと、**図2**となる。

631から633までの歌群を示してみよう。

(題しらず)

読人しらず

631 くりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世に
し住まへば

東の五条わたりに、人を知りおきてまかり通ひけり。
忍びなる所なりければ、門よりしもえ入らで、垣の
崩れより通ひけるを、たびかさなりければ、主聞き
つけてかの道に夜ごとに人を伏せて守らすれば、行

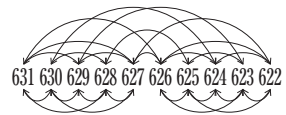


図2

きけれどえ逢はでのみ帰りきて、よみてやりける

なりひらの朝臣

632 人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにもうちも寝な

なむ

題しらず づらゆき

633 忍ぶれど恋しきときはあしひきの山より月のいでてこそ
くれ

読人しらず

634 恋ひ恋ひてまれにこよひぞ逢坂の木綿つけ鳥は鳴かずも

あらなむ

小野小町

635 秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことごとくもなく明
けぬるものを

凡河内躬恒

636 長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば

読人しらず

637しののめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき

藤原国経朝臣

638明けぬとて今はの心つくからになど言ひ知らぬ思ひ添ふらむ

寛平御時後の宮の歌合の歌

としゆきの朝臣

639明けぬとて帰る道にはこきたれて雨も涙も降りそほちつ

つ
題しらず

寵

640しののめの別れを惜しみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

読人しらず

641郭公夢かうつつか朝露のおきて別れし暁の声

大江千里

642玉匣あけば君が名たちぬべみ夜深く来しを人見けむかもしき

人に逢ひて、朝によみてつかはしける

なりひらの朝臣

643寝ぬる夜の夢をはかなみまじろめばいやはかなにもなりまさるかな

業平朝臣の伊勢の国にまかりたりける時、齋宮なりける人にいとみそかに逢ひて、またの朝に、人やる

すべもなく思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける

読人しらず

645君やこし我やゆきけむ思ほえず夢かうつつか寝てか覚めてか

返し

なりひらの朝臣

646かきくらすす心の闇にまどひにき夢うつつとは世人さだめよ

よ
題しらず

読人しらず

647うばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

648さ夜ふけて天の門渡る月影にあかすも君をあひ見つるかな

649君が名も我が名もたてじ難波なるみつとも言ふなあひきとも言はじ

650名取河瀬々の埋れ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ

651吉野川水の心はやくとも滝の音には立てじとぞ思ふ

小野春風

652恋しくは下にを思へ紫の根摺りの衣色にいづなゆめ

653花すすき穂にいでて恋ひば名を惜しみ下結ふ紐のむすほほれつつ

631からと635までの歌群は、631と635は「名」の語を詠み込んで共通し、632が「わが通ひ路の関守はよひよひごとにも寝ななむ」、634は「逢坂の木綿つけ鳥は鳴かずもあらなむ」と、い

ずれも関守や木綿つけ鳥にあつらえ望む表現を有して対をなす。また、631から635までの歌群は、631と632が「人」の語を詠み込んで対応し、632が「よひよひごとにも寝ななむ」と夜ごと

恋しい人に逢いたいが番人がいて逢いに行けないと詠ずるのに
対し、633は「忍ぶれど恋しきときは」「いでてこそくれ」とこ
らえきれないほど恋しい時は恋人に逢いに行くど対照的な内容
を詠じて対をなし、633は「あしひきの山より月のいでてこそく
れ」、634は「恋ひ恋ひてまれにこよひぞ逢坂の」と序詞的な表
現を用いて対をなす。634は「逢坂」、635は「逢ふといへば」と
ともに「逢ふ」の語を詠み込んで共通する。631から635までの歌
群は、それぞれの歌が前後の歌と対応関係を持ちつつ、633を中
心に同心円状に左右対称の対応構造を形成する。

また、634から636までの歌群は、634は「恋ひ恋ひてまれにこよ
ひぞ逢坂の」、635は「秋の夜は名のみなりけり逢ふといへばこ
とぞともなく開けぬるものを」、636は「長しとも思ひぞはてぬ
昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」といずれも「夜」「逢ふ」
の語を詠み込んで相互に対応する。

636は「逢ふ人からの秋の夜なれば」、637は「しののめのほが
らほがらと明けゆけば」とどちらも順接確定条件の構文を取っ
て共通する。

637から640までの歌群は、637は「しののめのほがらほがらと明
けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」、638は「明けぬとて
今ほの心つくからに」、640は「しののめの別れを惜しみ我ぞま
づ鳥よりさきになきはじめつる」と、いずれも恋人と逢った夜
が開け、別れなければならなくなった時の心情を詠じて共通し、
639は「明けぬとて帰る道にはこきたれて」と、夜が開けて女の
もとから帰る途中の様子を詠ずる。時間的な経過に沿って配列
するならば、639が四首の一番最後に配列されてしかるべきである

うが、640が「我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる」と「鳥」
の鳴く様を詠じ、641が「郭公」の鳴く様を詠じていることから
その連続を考慮して、640が637から640までの歌群の最後に配置さ
れたのであろう。また、637から639までの三首は、637が「しのの
めのほがらほがらと明けゆけば」と夜が開け行く様を詠じ、638
が「明けぬとて今はの心つくからに」、と夜が開けてしまった
と詠じ、639が「明けぬとて帰る道には」と夜が開けて男が帰る
道中の様子を描くというように、時間を追って配列されており、
それに続く歌群が女の許から帰ってきた後の歌を配置している
ことから、その歌群との差別化を図るため、女の許での別れの
歌である640が637から640までの歌群の最後に配置されたとも考え
られる。637から640までの歌群は、「しののめ」、「明けぬとて」
と夜が開けた時の様を詠じて、四首それぞれの歌が他の三首の
全てと対応するという関係を形成する。

640から644までの歌群は、640は「鳥」、641は「郭公」を詠じて
共通し、640は「しののめの別れを惜しみ」、642は「玉匣あけば
君が名たちぬべみ」とミ語法を用いて共通する。640は「なきは
じめつる」、643は「おきけむ方も知らざりつ」といずれも完了
の助動詞「つ」を用いて共通し、640は「しののめの別れを惜し
み」、644は「寝ぬる夜の夢をはかなみ」とここでもミ語法を用
いて対応する。641は「おきて別れし」、642は「夜深く来しを」
と過去の助動詞「き」を用いて対をなし、641は「朝露のおき
て」、643は「今朝は霜おきけむ方も」と、どちらも「起く」と
「置く」を掛詞として用いて共通する。641は「夢かうつつか」、
644は「寝ぬる夜の夢をはかなみ」と「夢」の語を詠み込んで対

をなす。642は「人見けむかも」、643は「今朝は霜おきけむ方も」と過去推量の助動詞「けむ」を用いて共通し、642は「夜深く来しを」、644は「寝ぬる夜の」と「夜」の語を詠み込んで対応する。643は「今朝は霜おきけむ方も知らざりつ思ひいづるぞ消えて悲しき」と詠ずるのに対し、644は「人に逢ひて、朝によみてつかはしける」という詞書を有し、「寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」と詠ずるというように、後朝の切ない思いを詠じて共通する。640から644までの歌群は、歌群内のそれぞれの歌が他の全ての歌と対応するという対応関係を形成する。

644から647までの歌群は、644は「寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば」、645は「夢かうつつか寝てか覚めてか」、646は「夢うつとは世人さだめよ」、647は「さだかなる夢にいくらもまさらざりけり」といづれも「夢」の語を詠み込んでおり、四首全てが対応関係を持つ。644が業平の歌、645が業平と関係を持った女性からの歌、646がそれに対する業平の返歌、647は646の業平の歌に詠み込まれている「闇」「夢」「うつつ」を用いた歌という順に配列されている。

647は「うばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」と詠ずるのに対し、648は「さ夜ふけて天の門渡る月影にあかすも君をあひ見つるかな」と正反対の内容を詠じて対をなす。

648から650までの歌群は、648が「あかすも君をあひ見つるかな」と詠ずるのに対し、649は「難波なるみつとも言ふな」と「見る」の語を詠み込み、650も「あひ見そめけむ」と「見る」

の語を詠じて対応する。648、649、650はいずれも「見る」の語を詠み込んで共通し、三首の歌それぞれが他の二首と対応して、三首全てが対応関係を持つ歌群を形成する。650は「名取河」詠み込んで、651の「吉野川」と対応することから、三首の歌群の末尾に650が配置されたのであろう。

649から653までの歌群は、649は「君が名も我が名もたてじ難波なるみつとも言ふなあひきとも言はじ」、653が「花すすき穂にいでて恋ひば名を惜しみした結ふ紐のむすほれつつ」と恋の噂が立たないようにすることを詠じて対応し、650は「名取河瀬々の埋れ木」、651は「吉野川水の心ははやくとも滝の」、652は「紫の根摺りの衣」と、いずれも序詞を用い、二人の関係を世間に知られたくない心情を詠じて、三首全てが相互に対応する。649と650は二人の関係が噂となることを恐れている点で共通し、652も恋の思いを表面に表さないと詠じて対をなす。649から653までの歌群は、651を中心に同心円状に左右対称の対応構造を構成すると同時に、前後の歌がそれぞれ対応関係を持ち、かつ650、651、652の三首が全対応するという関係を形成する。

また、631は「またもなき名は立ちぬべし」、653は「花すすき穂にいでて恋ひば名を惜しみ」といづれも「名」の語を詠み込んで共通し、632は「わが通ひ路の関守はよひよひごとのうちも寝ななむ」、652は「恋しくは下にを思へ紫の根摺りの衣色にいづなゆめ」と、どちらも他者に何かすることを要望している点で共通し、633は「あしひきの山より月の」、651は「吉野川水の」が序詞的な表現となっている点で対をなす。634は「逢坂の木綿つけ鳥」、650は「名取河瀬々の埋れ木」と地名プラス景物とい

う表現を取って対をなし、635と649はともに「名」「逢ふ」の語を詠み込んで共通する。636は「長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」と長い秋の夜も恋しい人との逢瀬には短いと詠ずるのに対し、648は「さ夜ふけて天の門渡る月影にあかすも君をあひ見つるかな」と夜恋しい人と十分にあうことができて満足していると対照的な内容を詠じて対をなす。631から636までの六首と648から653までの六首は、642を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

さらに、642は「人」の語を詠み込んで、同じく「人」の語を詠み込む631、632と対をなし、「来し」と詠じて633の「来れ」と対応し、「夜深く来しを人見けむかも」と「夜」の語を詠み込んで、634が「こよひ」、635と636が「秋の夜」といづれも「夜」を詠み込んでいるのに対応する。また642は、「見けむ」と「見る」の語を詠み込んで、648が「見つるかな」、649が「みつとも言ふな」、650が「あひ見そめけむ」といづれも「見る」の語を詠み込む歌と対応し、「玉匣あけば」と条件を表す表現を用いて、651の「水の心はやくとも」、652の「恋しくは」、653の「穂にいでて恋ひば」といった条件表現と対応する。

641は「夢かうつつか」と詠じて、644の「夢」、645、645、647の「夢」、「うつつ」の語と対応し、643は「今朝は霜おきけむ方も知らざりつ」と詠じて、637の「しののめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」、638の「明けぬとて今はの心つくからになと言ひ知らぬ思ひ添ふらむ」、639の「明けぬとて帰る道にはこきたれて雨も涙も降りそほちつつ」、640の「しののめの別れを惜しみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつ

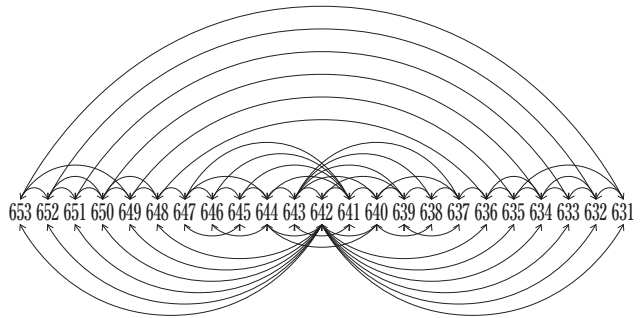


図3

る」といった歌と一夜を共にした後の朝の様子を描いて対応する。

以上述べてきた対応関係を图示すると、図3となり、631から653までの歌群は642を中心に左右対称の構成をなすことになる。続く653から667までの歌群を示すと、次のようになる。

(題しらず)

小野春風

553 花すすき穂にいでて恋ひば名を惜しみ下結ふ紐のむすば
はれつつ

橘清樹が忍びにあひ知れりける女のもとよりおこせ
たりける
読人しらず

554 思ふどちひとりひとりりが恋ひ死なば誰によそへて藤衣き
む
返し
橘清樹

555 泣き恋ふる涙に袖のそほちなば脱ぎかへがてら夜こそは
着め
題しらず
こまち

556 うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るが
わびしさ

557 限りなき思ひのままに夜もこむ夢路をさへに人はとがめ
じ

558 夢路には足もやすめず通へどもうつつに一目見しごとは
あらず
読人しらず

559 思へども人目つつみの高ければかはと見ながらえこそ渡
らぬ

560 たぎつ瀬のはやき心をなにかも人目つつみの堰きとど
むらむ

寛平御時後の宮の歌合の歌
紀友則

561 紅の色にはいでし隠れ沼の下にかよひて恋ひは死ぬとも
題しらず
みつね

562 冬の池に住む鳩鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らず

な
563 笹の葉に置く初霜の夜を寒みしみはつくとも色にいでも
やは
読人しらず

564 山科の音羽の山の音にだに人の知るべくわが恋ひめかも
この歌、ある人、近江の采女のとなく申す
清原深養父

565 満つ潮の流れひる間を逢ひがたみみるめの浦によるをこ
そ待て
平貞文

566 白河の知らずともいはじ底清み流れて世々にすまむと思
へば
とものり

567 下にのみ恋ふればくるし玉の緒の絶えて乱れむ人などが
めそ

563から567までの歌群は、553は「した結ふ紐」、567は「玉の緒」を詠み込んで共通し、554は「思ふどちひとりひとりりが恋ひ死なば」、「藤衣きむ」566は「流れて世々にすまむと思へば」、「知らずともいはじ」といづれも条件を表す構文を取り、意志を示す表現を用いて対をなす。555は「夜こそは着め」、565は「よるをこそ待て」と類似した表現を用いて対をなし、566は「うつつにはさもこそあらめ」、564は「わが恋ひめかも」といづれも助動詞「む」の已然形を用いた反語表現を取って対応する。557と563はいづれも「夜」の語を詠み込んで共通し、558は「通へども」、562は「そこに通ふ」といづれも「通ふ」という動詞を詠み込

んで対をなす。659は「人目つつみ」に「堤」、「かは」に「川」と「彼は」、661は「下」に「心の中」の意を掛けるというようにいずれも掛詞を用いて共通する。653から667までの歌群は、660を中心と同心円状に左右対称の構造を形成する。

また、653から659までの歌群は、653は「花すすき穂にいでて恋ひば」、659は「思へども人目つつみの高ければ」といずれも順接確定条件の構文を用いて共通し、654は「思ふどちひとりひとりが恋ひ死なば」と順接仮定条件、658は「夢路には足もやすめず通へども」と逆接確定条件の構文を用いて対をなす。655は「夜こそは着め」、657は「夜もこむ」といずれも「夜」の語を詠み込み、意志の助動詞の已然形を用いて対応する。653から659までの歌群は、656を中心と同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

661から667までの歌群は、661は「隠れ沼の下にかよひて」、667は「下」にのみ恋ふればくるし」と類似した表現を用い、662と666はともに「そこ」という語を用いて共通する。663は「笹の葉に置く初霜の夜を寒み」、665は「満つ潮の流れひる間を逢ひがたみ」といずれもミ語法を用いて共通する。661から667までの歌群も、661から667までの歌群と同様に、664を中心と同心円状に左右対称の対応構造を形成する。

さらに、653から655までの歌群は、653は「花すすき穂にいでて恋ひば」、654は「思ふどちひとりひとりが恋ひ死なば」、655は「泣き恋ふる涙に袖のそほちなば」と、いずれも順接仮定条件の構文を取り、かつ653は「した結ふ紐の」、654は「藤衣きむ」、655は「涙に袖のそほちなば」といずれも衣類に関する語を詠み

込んで三首が相互に対応し、歌群の最後に位置する655の「夜こそは着め」という表現と、続く656の「うつつにはさもこそあらめ」という表現が「こそ」という係助詞を用いた係り結びの構文を取って対をなす。

656から658までの歌群は、656が「夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ」、657が「限りなき思ひのままに夜もこむ夢路をさへに人はとがめじ」、658が「夢路には足もやすめず通へどもうつつに一目見しことはあらず」と全て夢路での逢瀬を詠じた歌を並べて、三首が相互に対応する歌群を構成する。この三首の歌群の最終歌658は「うつつに一目見しことはあらず」と詠じて、それに続く659の「思へども人目つつみの高ければ」の「人目」と対応する。

659から661までの歌群は、659は「人目つつみ」、660は「人目つつみ」「かは」、661は「下」という掛詞を用いている点で、三首が相互に対応する。659から661までの歌群の最後に位置する661は「隠れ沼の下にかよひて」と詠じて、662の「鳩鳥のつれもなくそこに通ふ」という歌と、「通ふ」の語を共有し、「下」「そこ」という表現に掛詞を用いて共通する。

662から664までの歌群は、662は「冬の池に住む鳩鳥の」、663の「笹の葉に置く初霜の夜を寒み」、664は「山科の音羽の山」といずれも序詞を用いて、三首が相互に対応する。662から664までの歌群の最終歌664は「山科の音羽の山」、続く665が「みるめの浦」と山と浦を詠み込んで対をなす。

665から667までの歌群は、665が「昼」と「干る」、「見る目」と海藻の「みるめ」、「夜」と「寄る」を掛詞として用い、666は

「流れ」と「長らえて」、「住む」と「澄む」の掛詞、667は「下」に「心」の意を掛け、「絶えて」に「ひどく」の意味を持たせ、「乱れむ」に「玉が乱れる」と「取り乱して」の意を掛けるというように三首とも掛詞を多用して共通する。

653から667までの歌群は、歌群内の三首が相互に対応関係を形成する653から655までの歌群、656から658までの歌群、659から661までの歌群、662から664までの歌群、665から667までの歌群という五つの歌群を含んでおり、これら五つの歌群はそれぞれの歌群の末尾の歌と、それに続く歌群の冒頭の歌が、それぞれ対応関係を有する形で、歌群全体が構成されている。以上述べてきた対応関係を図示すると図4となる。

667から676までの歌群を示してみよう。

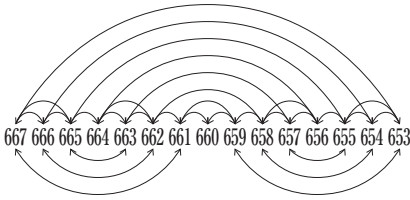


図4

(題しらず)

とものり

667 下にのみ恋ふればくるし玉の緒の絶えて乱れむ人などが
めそ

668 わが恋を忍びかねてはあしひきの山橋の色にいでぬべし
読人しらず

669 大方はわが名もみなと漕ぎいでなむ世をうみべたにみる
めすくなし

670 枕よりまた知る人も泣き恋を涙堰きあへずもらしつるか
なり
平貞文

671 風吹けば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべら
なり
読人しらず

672 池にすむ名ををし鳥の水を浅み隠るとすれどあらはれに
けり
この歌は、ある人のいはく、柿本人麿がなり

673 逢ふことは玉の緒ばかり名の立つはよしのの河のたぎつ
瀬のごと

674 群鳥の立ちにしわが名いまさらに事なしぶともしるしあ
らめや

675 君によりわが名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり
伊勢

676 知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに
立つらむ

667から671までの歌群は、667は「下」にのみ恋ふればくるし玉の緒

の絶えて乱れむ人などがめそ」、669は「大方はわが名もみなと漕ぎいでなむ」というように、いずれも恋の思いを表そうという意志を示し、668は「わが恋を忍びかねてはあしひきの山橋の色にいでぬべし」、671は「風吹けば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり」と恋の思いに耐えかねて、その思いを表してしましうだ」と詠じ、670は「枕よりまた知る人も泣き恋を涙堰きあへずもらしつるかな」と恋の思いを漏らしてしまつたと詠じている。これらの歌はいずれも恋の思いを隠すことができなくなった状態を詠じており、五首の歌がそれぞれ歌群内の他の全ての歌と対応関係を持つことになる。

続く672から676までの歌群は、672は「池にすむ名ををし鳥の」
 「隠るとすれどあらはれにけり」、673は「名の立つはよしのの河のたぎつ瀬のごと」、674の「群鳥の立ちにしわが名」、675は「わが名は」「野にも山にも立ちみちにけり」、676は「塵ならぬ名のそらに立つらむ」と、いずれも恋愛関係にあることが評判になつてしまつたことを詠じて共通する。これら672から676までの歌群は、全て恋愛関係が世間に知られた状態を詠じた歌という点で共通することから、歌群内のそれぞれの歌が、歌群内の他の四首と全て対応するという関係を持つ。

また、667から671までの歌群と672から676までの歌群を繋ぐ671と672の歌は、671が「ねにあらはれて泣きぬべらなり」、672が「隠るとすれどあらはれにけり」とともに「あらわる」の語を詠み込んで対応する。

さらに、667と673は「玉の緒」の語を詠み込んで対応し、668は「わが恋」が表れそうになる様を「あしひきの山橋の色にいで

ぬべし」と「あしひきの山橋の」という序詞を用いて表現するのに対し、675は我が名が立ち満ちたことを「わが名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり」と「花に春霞野にも山にも」という序詞を用いて対をなす。669は「大方はわが名もみなと漕ぎいでなむ」と詠ずるが、673は「名の立つはよしのの河のたぎつ瀬のごと」と「名」の語を詠み込んで共通する。670は「枕よりまた知る人も泣き恋を」、676は「知ると言へば枕だにせで寝しものを」といずれも「知る」「枕」の語を詠み込んで対応し、671と672は、先に述べた通りいずれも「あらわる」の語を詠み込んで共通する。

667から676までの歌群は、667から671までの歌群と672から676までの歌群が歌群内で全ての歌が対応し、671と672の対を中心に左右対称の対応関係を持つと同時に、667から671までの歌群内のそれぞれの歌が672から676までの歌群の歌と対応し、それらの対応関係も671と672の対を中心に左右対称の対応関係を構築する。こうした対応関係を図示すると図5となる。

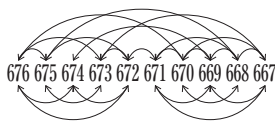


図5

『古今集』恋の部三は、巻頭歌616から622までの歌群、622から631までの歌群、631から653までの歌群、653から667までの歌群、667から巻頭歌676までの歌群の五つの左右対称構造を持つ歌群で構成され、『古今集』の巻頭歌と対応する616は622、622は631、631は653、653は667、667は恋の部三の巻頭歌676と対応することになる。

*

恋の部四の構造分析に移ろう。恋の部三の巻頭歌676と恋の部四の巻頭歌677から698までの歌を示すと以下のようになる。

(題しらず)

伊勢

676 知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに
立つらむ

題しらず

読人しらず

677 陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ
678 あひ見ずは恋しきこともなからまし音にぞ人を聞くべか
りける

つらゆき

679 石上布留の中道なかなかに見ずは恋しと思はましやは

藤原忠行

680 君といへば見まれ見すまれ富士の嶺のめずらしげなく燃
ゆるわが恋

伊勢

681 夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身な
れば

読人しらず

682 石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見ぬ飽かずもある

かな

683 伊勢の海女の朝な夕なに潜くてふみるめに人を飽くよし
もがな

684 春霞たなびく山の桜花見れども飽かぬ君にもあるかな

ふかやぶ

685 心をぞわりなきものと思ひぬるものからや恋しかる
べき

凡河内躬恒

686 枯れはてむのちをば知らで夏草の深くも人の思ほゆるか
な

読人しらず

687 明日香河淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れ
じ

寛平御時后の宮の歌合の歌

688 思ふてふ言の葉のみや秋を経て色もかはらぬものにはあ
るらむ

題しらず

689 狭筵に衣方敷きこよひもや我を待つらむ宇治の橋姫

又は、「うちのだまひめ」

690 君や来む我やゆかむのいさよひに槓の板戸もささず寝に
けり

素性法師

691 いま来むといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつ
るかな

読人しらず

692 月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たず
しもあらず

693 君来ずは聞へも入らじ濃紫わが元結に霜は置くとも

694 宮城野の本あらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待
て

695 あな恋し今も見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子

696 津の国のなには思はず山城のとばにあひ見むことをのみ
こそ

つらゆき

697 しき鳥の大和にあらぬ唐衣ころも経ずして逢ふよしもが

な

ふかやぶ

698 恋しとは誰が名づけけむ言ならむ死ぬとぞただにいふべ
かりける

676から698までの歌群は、676と698は「名」の語を詠み込んで共通し、677は「陸奥の安積の沼の花かつみ」、697は「しき鳥の大和にあらぬ唐衣」といづれも地名を詠み込んだ序詞を用いて対をなす。678は「あひ見ずは」、696は「あひ見む」と詠じて対をなし、679は「なかなかに見ずは恋しと」、695は「あな恋し今も見てしが」とどちらも「見る」の他に「恋し」の語を詠み込んで対応する。680は「君といへば」、694は「君をこそ待て」といづれも「君」の語を詠み込んで対応し、681は「夢にだに見ゆとは見えじ」、693は「君来ずは聞へも入らじ」と、ともに打ち消しの意志を表す助動詞「じ」を用いて対をなす。682は「飽かずも

あるかな」、692は「待たずしもあらず」と類似した表現を用いて対をなし、683は「朝な夕なに」、690は「君や来む我やゆかむ」といづれも対になる表現を用いて対応する。684は「春霞たなびく山の桜花」と春の風景を表現するのに対し、691は「長月の有明の月」と秋の景を描いて対をなし、685は「見るものからや」、689は「こよひもや」といづれも疑問を表す「や」という助詞を用いて共通する。686は「夏草」、688は「言の葉」「秋を経て」と「夏」や「秋」という季節と植物ないし植物を連想させる語を詠み込んで対をなす。676から698までの歌群は、683と690の対と684と691の対が交差しつつ、687を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

また、676は「そらに立つらむ」、677は「恋ひやわたらむ」といづれも「らむ」という現在推量の助動詞を用いて対応し、677と678は「見る」という動詞、「まし」という助動詞を共有して対をなす。678は「あひ見ずは」、679は「見ずは恋しと」といづれも類似した表現を用いて対応し、679は「見ずは」、680は「見まれ見ずまれ」とともに「見る」という語を用いて共通する。680は「見まれ見ずまれ」、681は「見ゆとは見えじ」と類音を繰り返し、かつ680は「君といへば」、681は「身なれば」とどちらも動詞の已然形プラス「ば」の形を用いて共通し、681は「見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に耽づる身なれば」、682は「石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見め」と「見ゆ」、「見る」の語を用い、同じ行為を何度も繰り返す様を詠じて対応する。682は「かくこそは見め飽かずもあるかな」、683は「みるめに人を飽くよしもがな」と「見る」と「飽く」の語を共有し、683は

「かくこそは見め飽かずもあるかな」、684は「見れども飽かぬ君にもあるかな」と、これも「見る」、「飽く」の語を詠じて対応する。684は「見れども飽かぬ」、685は「見るものからや恋しかるべき」といづれも「見る」という動詞を用いて対をなし、685は「心をぞわりなきものと思ひぬる」、686は「深くも人の思ほゆるかな」と「思ふ」、「思ほゆ」という語を詠み込んで対応する。686は「深くも人の思ほゆるかな」、687は「思ひそめてし人は忘れじ」とそれぞれ「思ほゆ」「思ふ」の語を用いるとともに「人」の語を共有し、687は「思ひそめてし人」、688は「思ふてふ言の葉」といづれも「思ふ」の語を共有する。688は「色もかはらぬものにはあるらむ」、689は「我を待つらむ宇治の橋姫」と現在推量の助動詞「らむ」を共有し、689は「こよひもや我を待つらむ」、690は「君や来む我やゆかむ」といづれも助動詞「や」を用いて疑問文を形成する。690は「君や来む」、691は「いままむ」と、「来」という動詞を共有し、691は「いままむ」、692は「来てふに似たり」と「来」を用いて共通する。692は「来てふに似たり」、693は「君来ずは」といづれも「来」という動詞を共有し、690から693までの歌群は四首が相互に対応する。693は「濃紫わが元結に霜は置くとも」、694は「本あらの小萩露を重み」と「霜」や「露」が置く様を詠じて対応し、694「宮城野の本あらの小萩」、695は「山賤の垣ほに咲ける大和撫子」と「萩」や「撫子」という秋の植物を詠み込んで共通する。695は「大和撫子」に「大和」という地名、696は「津の国のなには」、「山城のとば」と地名を詠み込んで対をなし、696は「津の国のなには」、「山城のとば」、697は「しき鳥の大和にあらぬ唐」と、こ

れも地名を詠み込んで対応する。695から697までの歌群は三首が相互に対応する。697は「ころも経ずして逢ふよしがな」と逢うことを切望するのに対し、698は「恋しとは誰が名づけけむ言ならむ死ぬとぞただにいふべかりける」と恋の成就を切実に願う心情を詠じて対をなす。以上のように、676から698までの歌群は全ての歌が前後に位置する歌と対応関係を形成する。

676から、676から698までの歌群の中心に位置する687からまでの歌群は、676は「塵ならぬ名」、687も「瀬になる世なり」とも」と断定の助動詞「なり」を用いて共通し、677は「花かつみ」、686は「夏草」といづれも植物を詠み込んで対応する。678は「あひ見ずは恋しきこともなからまし」、685は「見るものからや恋しかるべき」とどちらも相手を見たことで恋しい気持ちが起ったと詠じて対をなし、679は「石上布留の中道」、684は「春霞たなびく山の桜花」とどちらも序詞を用いて共通する。680は「見まれ見ずまれ」、683は「朝な夕なに」に対照的な語を連続して用いる表現を用いて対応し、681は「夢にだに見ゆとは見えじ」と打ち消しの意志を表す助動詞を用いるのに対し、682は「かくこそは見め」といづれも「見る」という動詞を用いるとともに、意志の表す助動詞を用いて共通する。676から687からまでの歌群は、681と682の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

687から698までの歌群は、687は「瀬になる世なりとも」、698は「言ならむ」といづれも断定の助動詞「なり」を用いて共通し、688は「秋を経て」、697は「ころも経ずして」と何れも「経」という動詞を用いて対をなす。689は「宇治」、696は「津の国のな

には、「山城のとば」といずれも地名を詠み込んで対をなし、690は「槿の板戸」、695は「山賤の垣ほ」といずれも家の回りにある事物を詠じて対応する。691は「待ちいでつるかな」、694は「風を待つこと」とどちらも「待つ」という動詞を詠み込んで対をなし、692は「待たずしもあらず」、693は「君来ずは」とともに打ち消しの助動詞「ず」を用いて対応する。687から698までの歌群は、692と693の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

さらに、676から680までの歌群は、676は「知ると言へば」、680は「君といへば」と類似した表現を用いて対をなし、その二首に挟まれた677から679までの歌群は、「かつ見る人に恋ひやわたらむ」、678は「あひ見ずは恋しきこともなからまし」、679は「見ずは恋しと思はましやは」といずれも「見る」の語を用い、逢って恋しく思ったと詠じて共通し、かつ677と678は「人」の語を共有し、678は「なからまし」、679は「思はましやは」と類似した表現を取り、677は「陸奥の安積の沼の花かつみ」、679は「石上布留の中道」と地名を詠み込んだ序詞を用いて対をなすというように、677から679までの歌群は三首が相互に対応する。

680から685までの歌群は、680は「君といへば見まれ見ずまれ富士の嶺のめずらしげなく燃ゆるわが恋」、685は「心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや恋しかるべき」というように、いずれも理性では制御できない恋の情念の有り様を描いて対応する。その二首に挟まれた681から684の歌群のうち、682は「立ち返りかくこそは見め飽かずもあるかな」、683は「みるめに人を飽くよしもがな」、684は「見れども飽かぬ君にもあるかな」と

いずれも「飽く」の語を詠み込んで、恋の相手をいくら見ても見飽きないと詠じて、相互に対応する。また、その三首の前に位置する681は「夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身なれば」と自らの容色を恥じることから、夢にさえ相手に自分の顔を見られたくないと、それに続く三首と対照的な内容を詠じて四首それぞれが相互に対応する。680から685までの歌群は、外側に位置する680と685が対応し、それに挟まれた681から684までの四首は、それぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという対応関係を形成する。

686から688までの歌群は、686が「枯れはてむのちをば知らで」、687が「明日香河淵は瀬になる世なりとも」、688が「思ふてふ言の葉のみや秋を経て色もかはらぬものにはあるらむ」というように、いずれも世の無常を詠じ、男女の仲の永遠でないことを詠じて三首それぞれが他の二首といずれも対応関係を有し、三首全てが相互に対応する歌群を形成する。ただし、三首の最初に位置する686は「枯れはてむのちをば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな」と、いずれ訪れる破局などは考えられず相手を恋しく思う気持ちを表出し、続く687は「明日香河淵は瀬になる世なりとも思ひそめてし人は忘れじ」と世の無常を意識しつつもそれに抗おうとする気持ちを詠じ、三首目の688で「思ふてふ言の葉のみや秋を経て色もかはらぬものにはあるらむ」相手の愛の誓いの言葉だけがいつまでも残っているが、相手の気持ちが冷めてしまったというように、恋の気持ちが起こって冷めていく過程をなぞるように並べられている。

689から694までの歌群は、689は「我を待つらむ」、694は「風を

待つごと君をこそ待て」といづれも「待つ」の語を詠み込んで対応する。その689と694の間に位置する690から693までの歌群は、690が「君や来む」、691が「いま来む」、692が「来てふに似たり」、693が「君来ずは聞へも入らじ」といづれも「来」という語を詠み込んで共通する。690から693までの四首はそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという対応関係を形成し、689から694までの歌群は、680から685までの歌群と同様、歌群の外側に位置する二首が対応し、その内側に位置する四首が全て対応関係を有するという歌群を形成する。

694から698までの歌群は、694は露の重さに耐えかねて風の吹くのを待っている萩のように、男が来るのを待っている女の重苦しい心情を詠じ、698は恋しい気持は死に等しいと詠ずるといように、二首とも恋の苦しさを詠じて対応する。その二首に挟まれた695から697までの歌群は、695は「あな恋し今も見てしが」、696は「なには思はず」「とばにあひ見むことをのみこそ」、697は「ころも経ずして逢ふよしもがな」と恋しい人に逢いたい思いを表現して、三首が相互に対応する。694から698までの歌群は、694と698が対応し、その二首の間に位置する695、696、697の三首がそれぞれ相互に対応するという歌群を形成する。

また、676から698までの歌群の中心に位置する687は「思ひそめてし人は忘れじ」と打ち消しの意志を表す助動詞「じ」を用いて、681の「夢にだに見ゆとは見えじ」、693の「君来ずは聞へも入らじ」という表現と対応する。687の前に位置する686は「枯れはてむのちをば知らで夏草の深くも」と自然の景を詠じて、684の「春霞たなびく山の桜花」という表現と対応し、687の後に位

置する688は「思ふてふ言の葉のみや秋を経て色もかはらぬものにはあるらむ」と「や」という助詞を用いて疑問文を構成し、690の「君や来む我やゆかむのいさよひに」という表現と対応する。676から698までの歌群の中心に位置する687は、四首が全て対応関係を持つ681から684の歌群の一番外側の681と対応し、同じく四首が相互に対応関係を形成する690から693までの歌群の一番外側の693と対応する。687の一首前の686は四首が全てが相互に対応関係を持つ681から684の歌群の一番内側の684と、687の一首後の688は四首が相互に対応関係を形成する690から693までの歌群の一番内側の690と対応する。

以上見てきたように、676から698までの歌群は、様々な対応関係を形成しつつ、687を中心に左右対称の対応関係を構築する。その関係を図示すると、**図6**になる。

続く698から707までの歌群を示して見よう。

(題しらず)

ふかやぶ

698 恋しとは誰が名づけけむ言ならむ死ぬとぞただにいふべかりける

読人しらず

699 み吉野の大川のへの藤波のなみに思はばわが恋ひめやは
700 かく恋ひむものとは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける

701 天の原踏みとどろかし鳴る神も思ふなかをばさくるもの

かは

702 梓弓ひき野のつづら末ついにわが思ふ人に言の繁けむ

この歌は、ある人「天の帝の近江の采女に賜ひけ

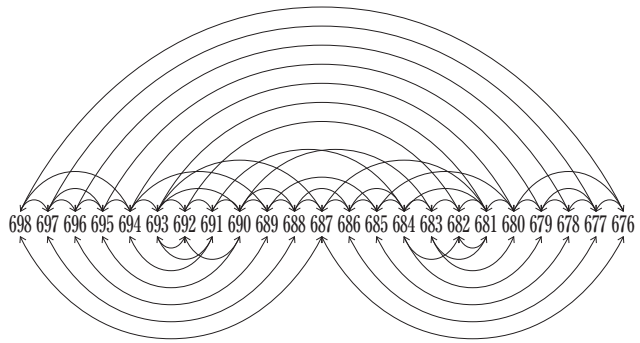


図 6

る」となむ申す

703 夏ひきの手引きの糸を繰り返し言繁くとも絶えむと思ふ
な

この歌は、「返しよみて奉りける」となむ

704 里人の言は夏野の繁くともかれゆく君に逢はざらめやは
藤原敏行朝臣の、業平朝臣の家なりける女をあひ知

りて、文遣はせりける詞に「いままうで来、雨の降りけるをなむ見わづらひ侍る」と言へりけるを聞きて、かの女に代わりてよめりける 在原業平朝臣
705 かずかずの思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

ある女の、業平朝臣を所定めずありきすと思ひて、よみてつかはしける 読人しらず

706 大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ 返し なりひら朝臣

707 大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありてふものを

698から707までの歌群は、698と707は「名」の語を詠み込んで対応し、699は「なみに思はばわが恋ひめやは」と恋しい人を一途に思っているのに対し、706は「思へどえこそ頼まざりけれ」と恋しい人を思いつつも、信頼できないと対照的な様を詠じて対をなす。700は「心のうらぞまさしかりける」と自らが心の中で占ったことが成就して、恋に夢中になっている様を詠ずるのに対し、705は「かずかずの思ひ思はず問ひがたみ」と相手の思いがどれほどのものか量りかねて辛い思いをしているとこれも対照的な状況を詠じて対をなし、701は「思ふなかをばさくるものかは」、704は「かれゆく君に逢はざらめやは」といづれも反語表現を用いて対応する。702は「梓弓ひき野のつづら」、703は「夏ひきの手引きの糸を」といづれも序詞を用いて対をなす。698から707までの歌群は、702と703の対を中心に同心円状に左右対称の

対応関係を形成する。

また、698から700までの歌群は、698は「恋しとは誰が名づけむ言ならむ死ぬとぞただにいふべかりける」と恋することは、死ぬことと同じだと詠じ、699の「なみに思はば」つまり並々に思うならば、私は恋をするわけではない、700は「かく恋ひむものとは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける」、つまりこのように激しく恋することを私は知っていたと、いずれも強い恋の思いを詠じて、三首が相互に対応する歌群を構成する。

700と701は、いずれも「思ふ」という動詞を詠み込み、700は「かく恋ひむものとは」、701は「思ふなかをばさくものかは」と類似した表現を用いて対応する。

701から704までの歌群は、701は「思ふなかをばさくものかは」、702は「わが思ふ人に言の繁けむ」、703は「絶えむと思ふな」といずれも「思ふ」の語を詠み込んで三首が相互に対応し、702は「わが思ふ人に言の繁けむ」、703は「言繁くとも絶えむと思ふな」、704は「里人の言は夏野の繁くとも」といずれも「言繁し」という表現を用いて相互に対応する。また、701は「鳴る神も思ふなかをばさくものかは」、704は「かれゆく君に逢はざらめやは」といずれも反語表現を用いて対応する。その結果、700から704までの歌群は、歌群内の全ての歌が歌群内の他の全ての歌と相互に対応し、四首全てが対応関係を有することになる。704は「かれゆく君」と相手の気持ち自身が自分から離れて行くこと、705は「かずかずの思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」と相手の思いが自分から離れていくと詠じて対をなす。ただし、704は「かれゆく君に逢はざらめやは」と相手へ

の強い思いを詠ずるのに対し、705は「身を知る雨は降りぞまされる」と自ら恋を諦めているような心境を詠じて対照的である。701から704までの歌群が一つのまとまりをなしていることを考慮すると、701から704までの歌群は男女の恋が続いている状態、705以下は恋の相手が離れていく状態を詠じていると考えることができるのではないだろうか。

705が恋人が去って行く様を詠ずるのに対し、706は「大幣の引く手あまたになりぬれば」と男が浮気をしていることを詠じ、707はその返歌で、男は浮気をしていることを否定していない。705から707までの歌群は、いずれも恋愛関係が危うい状態になっている様を詠じて共通し、三首が相互に対応する。

698から707までの歌群は、702と703の対を中心に、図7のような対応関係を示すことになる。

以下、706から723までの歌群を示してみよう。

ある女の、業平朝臣を所定めずありきすと思ひて、
よみてつかはしける



図7

読人しらず

706 大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざり
けれ

返し なりひら朝臣

707 大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありてふ
ものを

題しらず

読人しらず

708 須磨の海女の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきに
けり

709 玉かづら這ふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげ
もなし

710 誰が里に夜離れをしてか郭公ただここにしも寝たる声す
る

711 いで人は言のみぞよき月草のうつし心は色ことにして

712 いつはりのなきよ世なりせばいかばかり人の言の葉うれ
しからまし

まむ

素性法師

714 秋風に山の木の葉の移ろへば人の心もいかごとぞ思ふ

寛平御時後の宮の歌合の歌

とものり

715 蟬の声きけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば
題しらず

読人しらず

716 空蟬の世の人の言の繁ければ忘れぬものの離れぬべらなり

717 飽かてこそ思はむなかは離れなめそをだにのちの忘れが

たみに

718 忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ恋
しき

719 忘れなむ我をうらむな郭公人の秋にはあはんともぜず

720 絶えずゆく明日香の河の淀みなば心あるとや人の思はむ
この歌、ある人のいはく、中臣東人が歌なり

721 淀川のよどむと人は見るらめど流れて深き心あるものを

素性法師

722 そこひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあだ波は立
て

読人しらず

723 紅の初花染めの色深く思ひし心われ忘れめや

706 から723までの歌群は、706は「思へどえこそ頼まざりけれ」、
723は「思ひし心われ忘れめや」といずれも「思ふ」の語を詠み
込み、706は相手を「頼りにすることはできない」、723は相手を
「忘れることができない」と対照的な心情を詠じて対応する。

707は「流れてもつひに寄る瀬はありてふものを」、722は「山川
の浅き瀬にこそあだ波は立て」といずれも「瀬」の語を詠み込
み、707は「あちこちの女の許に通っているという噂が立って
も」と浮気の噂を認めるのに対し、722は「浅い思いしか持って
いない人に浮気の噂は立つものだ」と自らの浮気を否定する
というように、対照的な内容を詠じて対をなし、708は表面上は
「須磨の海女の塩焼く煙が風が激しいので思わぬ方にたなびい
た」と自然の情景を詠じつつ、その裏に相手の浮気を責める気
持を表現するのに対し、721も歌の表現は「淀川が淀んだとあ

または見ているようだが、実は流れて深い心があるのだが」と、ほとんど淀川の流れについて詠じているように見えて、その裏に「私に通っていくのが滞って見えるようだが、実は流れる水のように深い心があるのだが」と、表面は自然を詠じつつ、その背後に心情を寓意するという同様な表現の仕方を取り、かつ708が相手の浮気を責めるのに対し、721はあなたを深く思っていると詠じて対をなす。709は上三句で「玉かづら這ふ木あまたになりぬれば」という順接確定条件の構文を用いて、「あなたが多くの女性に通うようになったので」の意を表現し、「絶えぬ心のうれしげもなし」とするのに対し、720も上三句で「絶えずゆく明日香の河の淀みなば」と順接仮定条件の構文を取って、「あの人の所に私の訪れが希になったら」の意を表して「心あるとや人の思はむ」と詠じている点で歌の構成が類似し、かつ709は「あなたは浮気をしているのであなたの心が私から離れない言ってもうれしくない」と浮気を疑う立場からの歌であるのに、「絶えず通っていくことが間違になったならば、私が二心を持つているとあの人は思うだろうか」と浮気を疑われる側の立場からの詠歌となつている点が対照的で対をなす。710は「誰の所に夜離れをしてあなたはわたしの所に泊まつているのか」、719は「あなたに飽きられるのはいやだから、わたしからあなたを忘れようと思う。恨まないで欲しい」と、いずれも郭公を詠み込みつつ、相手の浮気を想像している点で共通する。711と718は「心」の語を共有し、711は相手の浮気心、718は自ら相手と別れようする心を詠じて対をなす。712は「いつはりのなきよ世なりせば」と順接仮定条件、716は「空蟬の世の人の言の繁けれ

ば」と順接確定条件の構文を用い、712は「世」「人の言の葉」、716は「世の人言」と詠じて対をなす。713は「誰がまことをか我は頼まむ」、717は「飽かてこそ思はむなかは離れなぬ」といずれも意志を現す助動詞「む」を用いて共通する。714は「秋風の山の木の葉の移ろへば」、715は「夏衣うすくや人のならむと思へば」といずれも順接確定条件の構文を用い、「秋風」や「夏衣」という季節を表す語を用い、どちらも「人」「思ふ」の語を詠み込んで対をなす。707から722までの歌群は、712と716の対と713と717の対が交差しつつ、714と715の対を中心に同心円状に左右対称の対応構造を構成する。

また、706から709までの歌群は、706は「大幣の引く手あまたになりぬれば」と大幣に託して相手の浮気を責める歌、707は「大幣と名にこそ立てれ」と大幣に託して自らの浮気を認める歌、708は「須磨の海女の塩焼く煙をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」、709は「玉かづら這ふ木あまたになりぬれば」と、いずれも相手の浮気を外界の事象に託して表現する。706から709までの歌群は、いずれも外界の事象を詠み込みつつ、浮気がなされていと詠ずる歌という点で四首が相互に対応する。

710から713までの歌群は、710は「一体誰に夜離れをして、ここにだけ泊まつているとおっしゃるのでしょうか」、711は「あの人は口では良いことを言っているが、本心は違っている」とどちらも相手が嘘をついていると詠じて対をなし、712は「いつはりのなきよ世なりせば」、713は「今さらに誰がまことをか我は頼まむ」と、ともに「いつはり」について詠じて対をなす。710から713までの歌群は、いずれも嘘を付いていることを詠じて、

四首が相互に対応する。

712から716までの歌群は、712と713は「いつはり」の語を共有し、712は「いつはりのなきせなりせば」と順接仮定条件、713は「いつはりと思ふものから」と逆接仮定条件を用いて対をなし、713は「いつはりと思ふものから」と逆接確定条件、714「秋風に山の木の葉の移ろへば」と順接確定条件を用いて対応する。714は「秋風に山の木の葉の移ろへば」、715も「うすくや人のならむと思へば」といずれも順接確定条件を用いて対をなし、715は「うすくや人のならむと思へば」、716は「空蟬の世の人の言の繁ければ」と、ともに順接確定条件の構文を用いて対応する。このように、712から716までの歌群は、順接仮定条件、逆接仮定条件、順接確定条件、逆接確定条件といった条件構文を用いており、712から716までの歌群は、歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応関係を持つ歌群を形成する。

713から717までの歌群は、713の「思ふものから」、714の「いかかとぞ思ふ」、715の「ならむと思へば」という表現がいずれも「思ふ」の語を詠み込んで、717の「飽かてこそ思はむなかは」という表現に詠み込まれた「思ふ」の語と対応し、715は「蟬」「人」716は「空蟬」「人言」の語を詠じて対をなし、716は「離れぬべらなり」、717は「思はむなかは離れなめ」とどちらも「離る」という動詞に「ぬ」という完了の助動詞を接続させた形を取って対応する。713から717までの歌群も、歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応関係を持つ歌群を形成する。

また、709と714はともに「心」の語を詠み込んで対をなす。

716から719までの歌群は、716は「忘れぬもの離れぬべらな

り」、717は「そをだになめのちの忘れがために」、718は「忘れなむと思ふ心のつくからに」、719は「忘れなむ我をうらむな」といずれも「忘る」の語を詠み込みつつ、恋人との別れを決意した歌が並ぶことから、これら四首は相互に対応関係を持つ歌群を形成する。

715は「うすくや人のならむと思へば」、720は「心あるとや人の思はむ」と詠じて、「人」「思ふ」の語を共有して対応する。

720から723までの歌群は、720は「明日香の河」、721は「淀川」、722は「山川」といずれも「川」を詠み込んで共通し、723は「心」の語を詠み込んで720、721と対応し、「われ忘れめや」と反語表現を用いて722の「そこひなき淵やはさわぐ」という反語表現と対応する。さらに、720から723までの四首は、全て恋人から浮気をしていると疑われた時に、それを否定する内容を詠じていることから、これら四首はそれぞれの歌が他の全ての歌と対応関係を持つ歌群を形成する。

以上述べてきた対応関係を図で示すと、**図8**となる。
続く723から729までの歌群を示すと、次のようになる。

(題しらず)

読人しらず

723 紅の初花染めの色深く思ひし心われ忘れめや

河原左大臣

724 陸奥のしのぶもちずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我ならなく

に

読人しらず

725 思ふよりいかにせよと秋風になびく浅茅の色ことになる

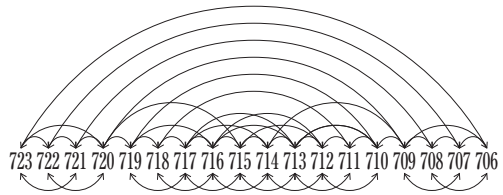


図 8

726 千ぢの色に移ろふらめど知らなくに心し秋の紅葉ならね
ば

小野小町

727 海女のすむ里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人の
言ふらむ

下野雄宗

728 曇り日の影としなれる我なれば目にこそ見えね身をば離
れず

つらゆき

729 色もなき心を人に染めしより移ろはむとは思ほえなくに

723は「思ひし心われ忘れめや」、724は「乱れむと思ふ我ならなくに」といづれも「我」「思ふ」という語、および「む」という助動詞を共有し、723と725は「思ふ」、「色」の語を共有して対応する。723と726は「色」「心」の語を共有し、723は「われ忘れめや」、727は「うらみむ」と意志の助動詞「む」を用いて共通する。723と728はいずれも「我」の語を詠み込んで対応し、723と729は「色」「染め」「心」それに助動詞の「む」を共有して対応をなす。

724と725はともに「思ふ」の語を詠み込んで対応し、724は「我ならなくに」、726は「知らなくに」と類似した表現を取って対応する。724は「我ならなくに」、727は「里のしるべにあらなくに」と類似した表現を取り、724は「乱れむ」、727は「うらみむ」といづれも意志を表明して対応し、724は「我ならなくに」、728は「我なれば」と類似した表現を用いて対応をなす。724は「我ならなくに」、729は「思ほえなくに」とこれも類似した表現を用いて対応をなす。

725は「秋風」「色」、726は「秋の紅葉」「色」という表現を用いて対応し、725は「思ふよりいかにせよとか」、727は「うらみむとのみ」と「と」という助動詞を用いて対応をなす。725は「浅茅の色ことになる」、728は「曇り日の影としなれる」と「なる」という動詞を用い、725と729は「色」の語を詠み込んで対応する。

726は「知らなくに」、727は「あらなくに」、726は「秋の紅葉ならねば」、728は「曇り日の影としなれる我なれば」といづれも類似した表現を用いて対応し、726と729は「色」の語を共有し、726は「移ろふらめど知らなくに」、729は「移ろはむとは思ほえ

なくに」とどちらも「移ろふ」という語を詠み込み、類似した表現を取って対をなす。

727は「海女のすむ里のしるべにあらなくに」、728は「曇り日の影としなれる我なれば」と条件表現を用いて対をなし、727は「里のしるべにあらなくに」、729は「移ろはむとは思ほえなくに」と類似した表現を用い、いずれも「人」の語を詠み込んで共通する。

728は「曇り日の影としなれる我なれば」、729は「色もなき心を人に染めしより」と非現実的な仮定を設定し、それに基づいた表現を行っている点で共通する。

このように見てくると、723から729までの歌群は、歌群を構成するそれぞれの歌が歌群内のそれ以外の歌と全て対応するという関係を構築していることになり、723から729までの歌群は、726を中心として左右対称の対応構造を持つことになる。この関係を図で示すと図9となる。

以下、728から747までの歌群を示すと、次のようになる。

(題しらず)

下野雄宗

728 曇り日の影としなれる我なれば目にこそ見えね身をば離



図9

れず

つらゆき

729 色もなき心を人に染めしより移ろはむとは思ほえなくに
読人しらず

730 めづらしき人を見むとやさかもせぬわが下紐の解けわた
らむ

731 かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖ぞ濡
れぬる

732 堀江漕ぐ棚無し小舟漕ぎかへりおなじ人にや恋ひわたり
なむ

伊勢

733 わたつみと荒れにし床をいまさらに払はば袖や泡と浮き
なむ

つらゆき

734 古へになはたちかへる心かな恋しきことにも忘れせて
人を忍びにあひ知りて、逢ひがたくありければ、そ
の家のあたりをまかりありきける折に、雁の鳴くを
聞きて、よみてつかはしける

大伴黒主

735 思ひいでて恋しきときは初雁の鳴きて渡ると人知るらめ
や

右大臣住まずなりにければ、かの昔おこせたりける
文どもをとり集めて返すとて、よみておくりける

典侍藤原因香朝臣

736 頼めこし言の葉いまは返してむわが身ふるれば置き所な

し

返し

近院の右大臣

737 今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや

見む

題しらず

よるかの朝臣

738 玉鉾の道は常にもまどはなむ人をとふとも我かと思はむ

読人しらず

739 待てといはば寝てもゆかなむしひてゆく駒の足折れ前の

棚橋

中納言源昇朝臣の近江介に侍りける時、よみてやれりける

閑院

740 逢坂の木綿つけ鳥にあらばこそ君が往き来をなくなくも

見ぬ

題しらず

伊勢

741 故里にあらぬものからわがために人の心の荒れて見ゆら

む

寵

742 山賤の垣ほに這へる青つづら人はくれども言づてもなし

酒井人真

743 大空は恋しき人の形見かは物思ふごとにながめらるらむ

読人しらず

744 逢ふまでの形見も我はなにせむに見ても心の慰まなくに

親のまもりける人の女にいと忍びて逢ひて、ものら言ひけるあひだに、「親の呼ぶ」と言ひければ、急

ぎ帰るとて裳をなむ脱ぎ置きて入りける。そののち、裳を返すとてよめる おきかせ

745 逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮かぶもくづなりけり

りけり

題しらず

読人しらず

746 形見こそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらましの

のを

五条の後の宮の西の対に住みける人に、本意にはあらでもの言ひわたりけるを、陸月の十日余りになむほかへ隠れにける。在り所は聞きけれど、えものも言はで、またの年の春、梅の花盛りに、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対にいきて、月の傾くまであばらなる板敷に臥せりてよめる

在原業平朝臣

747 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

して

728 から733までの歌群は、728と729が対応することは既に述べた。また728は「曇り日の影としなれる我」、733は「わたつみと荒れにし床」といずれも「我」や「床」が現実にはなりえない物になったと詠じて共通する。729は「色もなき心を人に染めしよりに」、730は「めづらしき人を見むとや」、731は「春雨のふるひとなれば」、732は「おなじ人にや恋ひわたりなむ」と、729から732までの歌群は四首とも「人」の語を詠み込んで共通するが、730は「わが下紐の解けわたるらむ」、731は「ふるひとなれば袖ぞ濡れぬる」と衣類を詠み込んで対応し、729は「色もなき心を人

に染めしより」、732は「おなじ人にもや恋ひわたりなむ」と時間の経過を詠み込んで対応する。732は「おなじ人にもや恋ひわたりなむ」、733は「私は袖や泡と浮きなむ」といづれも「なむ」という表現をとって対応する。

728から747までの歌群は、728と749はいずれも「身」の語を詠み込んで対応し、729と744は「心」の語を共有し、729は「思ほえなくに」、744は「慰まなくに」と類似した表現を取って対をなす。730は下紐が「解けわたるらむ」、743は裳を「とどめけむ」とともに衣服を詠み込みつつ、原因、理由を推量する助動詞を用いて共通し、731は久しく逢っていない以前の恋人に偶然逢った時の心情、746は全く逢えなくなった恋人を形見があることですつと忘れられないという心情というように対照的な恋の思いを描いて対をなす。

732は「おなじ人にもや恋ひわたりなむ」、743は「大空は恋しき人の形見かは」と「人」の語を詠み込んで対応し、733は「わらつみと荒れにし床」、744は「人の心の荒れて見ゆらむ」と「荒る」の語を詠み込んで対をなす。734は「古へになほたちかへる心かな恋しきことももの忘れせで」と昔と変わることのない自らの恋情を表現するのに対し、742は「人はくれども言づてもなし」と昔と打って変わった相手の心情を詠じて対をなし、735は「初雁」、740は「木綿つけ鳥」といづれも鳥を詠み込み、735は男が恋しい女の家の前を通る時に詠んだ歌、740は女が「逢坂の木綿つけ鳥に」になって、恋しい男が逢坂の関を往き来するのを泣く泣く見ようと詠じた歌という点でも対をなす。736は「頼めこし」と「来」という語、739は「しひてゆく」と「行く」とい

う語を詠み込んで対をなし、737は「形見とや見む」、738は「我がと思はむ」といづれも「む」という助動詞を詠み込む疑問文を第五句に据えて共通する。728から747までの歌群は、729と744の対と731と746の対、733と741の対と734と742の対が交差しつつ、737と738の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

732から735までの歌群は、732は「おなじ人にもや恋ひわたりなむ」、733は「わらつみと荒れにし床をいまさらにはばば」、734は「古へになほたちかへる心かな恋しきことももの忘れせで」、735は「思ひいでて恋しきときは」と、いづれも昔の恋を思い出している点で共通し、四首が相互に対応関係を形成する。

735から740までの歌群は、735は「人知るらめや」、736は「いまは返してむ」、737は「形見とや見む」、738は「我がと思はむ」、740は「なくなくも見め」といづれも「む」という助動詞を詠み込んで五首それぞれが相互に対応し、735は「初雁」、739は「駒」、736は「わが身ふるれば」と順接仮定条件の構文を散り、739は「待てといはば」と順接仮定条件の構文を取って対応し、737は「今はとて返す言の葉」、739は「待てといはば」とどちらも相手に言葉を送る様子を詠じて対をなす。738は「玉銚の道は常にもまどはなむ」、739は「待てといはば寝てもゆかなむ」とどちらも「なむ」という助動詞を用いて対応する。その結果、735から740までの歌群は、六首の歌それぞれが歌群内の他の全ての歌と対応するという対応関係を構成する。

740から743までの歌群は、741から743までは、いづれも「人」の語を詠み込んで相互に対応する。740は「逢坂の木綿つけ鳥にあ

らばこそ」と詠じて、741の「故里にあらぬものから」、743の「大空は恋しき人の形見かは」という表現と対応し、「君が往き来」と詠じて、742の「人はくれども」の「来」と対をなす。740から743までの歌群は、四首が相互に対応する歌群を形成する。

742から747までの歌群は、742人はややって来るが恋しい人からの言づてではない、747は恋しい人の所に通って行ったのに恋しい人はいないというように、いずれもかつての恋人との関係が全く絶たれた状況を、一方は人がやって来る、もう一方は自ら出かけていくと対照的な立場に立って詠じて対をなす。742と743はいずれも「人」の語を詠み込んで対応し、743から746までの歌群は、743は「大空は恋しき人の形見かは」、744は「逢ふまでの形見も我はなにせむに」、745は「逢ふまでの形見とてこそとどめけむ」、746は「形見こそ今はあたなれ」といずれも「形見」の語を詠み込んで四首が全て相互に対応する。特に、744と745は歌の冒頭部分で「逢ふまでの形見」と全く同じ表現を取って強く対応する。746は「形見こそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらましものを」と形見を見て昔の恋人のことを思い続けているのに対し、747は「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」かつて恋人と会った場所に行つて、いまは逢うことのできない恋人の思っている様を詠じるというように、どちらもある物や場所を見てかつての恋人を思っている様を詠じて共通する。

また、728から747までの歌群の対応関係の中心をなす737と738の対のうち、738は「我かと思はむ」、731は「我なれば」といずれも「我」の語を詠み込んで対をなし、738は「人をとふとも我か

と思はむ」と「人」の語を詠み込んで、同じく「人」の語を詠み込む729、730、731、732と対応し、737は「おのがものから形見とや見む」と「形見」の語を詠み込んで、743、744、745、746と対応し、737が自らの書いた恋文を形見にしようとするのに対し、747は「わが身ひとつはもとの身にして」と、自分の身だけが昔をしのぶよすがとなると詠じて対応する。

さらに、732から738までの歌群は、732は「おなじ人になや恋ひわたりなむ」、738は「人をとふとも我かと思はむ」といずれも「人」語を良き込んで対応し、733は「いまさらに私は袖や泡と浮きなむ」、737は「今はとて返す言の葉拾ひおきて」といずれも「今」の語を詠み込んで対をなし、734「古へになほたちかへる心かな恋しきことももの忘れせで」と昔のことが恋しく思い出されると詠ずるのに対し、736は「頼めこし言の葉いまは返してむわが身ふるれば置き所なし」と昔の事を忘れようとする姿勢を示して対をなす。732から738までの歌群は、735を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

737から743までの歌群は、737は「おのがものから形見とや見む」、743は「大空は恋しき人の形見かは」といずれも「形見」の語を詠み込んで対応し、738は「人をとふとも我かと思はむ」、742は「人はくれども言づてもなし」と「人」の語を詠み込んで対をなし、739は「待てといはば寝てもゆかなむしひてゆく駒の足折れ前の棚橋」、741は「故里にあらぬものからわがために人の心の荒れて見ゆらむ」と、ともに恋人が自分につれなくなつた様を詠じて対応する。737から741までの歌群は、740を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

また、737は「形見」の語を詠み込んで、「形見」の語を詠み込む744、745、746とそれぞれ対応する。このように見ると728から747まで歌群は、737と738の対を中心に左右対称の対応関係を構成している。その対応関係を示すと、**図10**になる。

なお、740番歌は

中納言源昇朝臣の近江介に侍りける時、よみてやりける

閑院

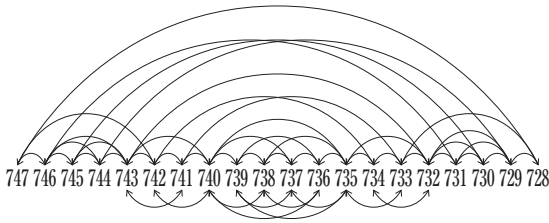


図 10

740逢坂の木綿つけ鳥にあらばこそ君が行き来をなくなくも
見ぬ

とあるが、源昇が中納言であったのは、延喜八年二月から同十四年八月までの間である。昇は延喜十四年八月に大納言となっているので、『古今集』の詞書は延喜八年二月から同十四年八月までの間に書かれたものということになる。『古今集』が成立したのは延喜五年であるから、この詞書は『古今集』成立以後に書かれたということになり、歌もその時点で増補されたものと推定される。仮に740番歌が延喜五年の『古今集』撰進以後に補入された歌だとすると、それと左右対称の対応関係にある735番歌も740番歌が補入されたのと同時に増補されたと推定される。

先に示した728から747までの歌群から、735番歌と740番歌を除いた歌群を示すと次のようになる。

(題しらず)

下野雄宗

728 曇り日の影としなれる我なれば目にこそ見えぬ身をば離
れず

つらゆき

729 色もなき心を人に染めしより移ろはむとは思ほえなくに

読人しらず

730 めづらしき人を見むとやしかもせぬわが下紐の解けわた
るらむ

731 かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖ぞ濡
れぬる

732 堀江漕ぐ棚無し小舟漕ぎかへりおなじ人にや恋ひわたり

なむ

伊勢

733 わたつみと荒れにし床をいまさらに払はば袖や泡と浮き
なむ

つらゆき

734 古へになほたちかへる心かな恋しきことにも忘れせで
右大臣住まずなりにければ、かの昔おこせたりける
文どもをとり集めて返すとて、よみておくりける

典侍藤原因香朝臣

736 頼めこし言の葉いまは返してむわが身ふるれば置き所な
し

返し

近院の右大臣

737 今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや

見む

題しらず

よるかの朝臣

738 玉鉾の道は常にもまどはなむ人をとふとも我かと思はむ

読人しらず

739 待てといはば寝てもゆかなむしひてゆく駒の足折れ前の
棚橋

む

伊勢

741 故里にあらぬものからわがために人の心の荒れて見ゆら

む

寵

742 山賤の垣ほに這へる青つづら人はくれども言づてもなし

酒井人真

743 大空は恋しき人の形見かは物思ふごとにながめらるらむ

読人しらず

744 逢ふまでの形見も我はなにせむに見ても心の慰まなくに

親のまもりける人の女にいと忍びて逢ひて、ものら

言ひけるあひだに、「親の呼ぶ」と言ひければ、急

ぎ帰るとて裳をなむ脱ぎ置きて入りにける。そのの

ち、裳を返すとてよめる おきかせ

745 逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮かぶもくづな

りけり

題しらず 読人しらず

746 形見こそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらまし

のを

五条の後の宮の西の対に住みける人に、本意にはあ

らでもの言ひわたりけるを、睦月の十日余りになむ、

ほかへ隠れにける。在り所は聞きけれど、えものも

言はで、またの年の春、梅の花盛りに、月のおもし

ろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対にいきて、

月の傾くまであばらなる板敷に臥せりてよめる

在原業平朝臣

747 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身に

して

この歌群の対応関係を图示すると図11となる。

延喜五年に奏上された『古今集』は、図11に示したような対

応関係をもち、735番歌と740番歌は入っていないかったと想定され

る。735番歌と740番歌は、延喜八年二月から同十四年八月までの

間のある時点で、『古今集』に補入されたと考えるのが妥当であらう。

『古今集』恋の部四は、676から698までの歌群、698から707までの歌群、706から723までの歌群、723から729までの歌群、728から747までの歌群の五つの歌群によって構成されており、『古今集』巻一の巻頭歌から継続してきた対応関係は、恋の部三の巻軸歌667から698、698から707、707から706を経由して723、723から729、729から728を経由して恋の部五の巻頭歌747に引き継がれることになる。

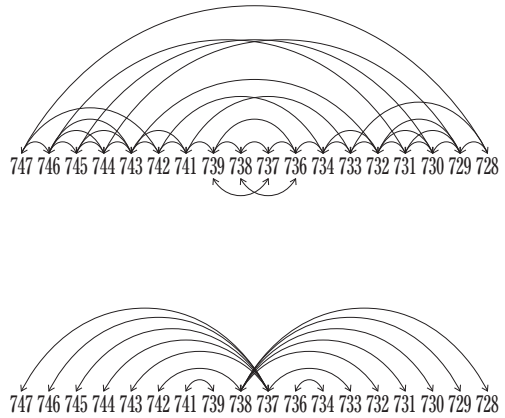


図 11

注 1 『古今集』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

(本学教授)